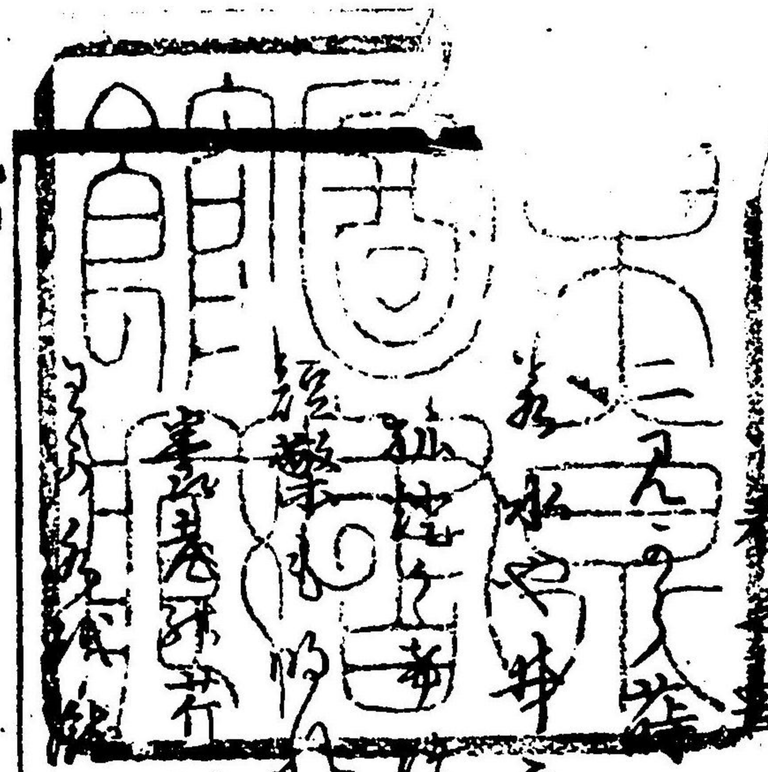
拙誥五卷

特59
496

掌中麦林舎乙由發句集

和十九年三月廿九日阿波国鶴付



二月八日

絵や法々門の松

孤竹仙人

戸々ゝとめ〻ゝ嘆ひ神

孤竹仙人

強藥水の内

くしゝ又面白さ書ふ奉

書ふ書ふ書ふ

元旦のめ〻とめふ祝ひて

年々や根白艸

主居宅の隅に植ゑし梅も春を
あらそふ色を結ぶなり
うゝ繰り菅乃方にそやかけり 縄
指ふかを姿さうもちゝ 暦
新年や老ぬまもれて 使 井筒
ゝ芳野の花と共遊ばんと大和すゝめる
十方庵の吉ゝの書状告あしられい
紙もうをうゝ野ゝ 世 初こゝろみ

笠縫も綿笠ゝく出来や新菜摘
俎板乃鮫ぬ 石ゝ弟ゝ 蕪 新
酌下詩の盛綱歳人 新菜つゝ
人日ぬ一茶に代世を去りし人をいとゝ
暫新世や蕪 手 ゝ ゝ 延乃春
見世ゝ名ゝ無かゝ 梅 ぬ花
児春ぬ名ゝ新年を梅干の助と答ふ
寺の梅形 姿 盛れ

又くのうや実を法寺乃也免弘花

天神奉納

祢の威弘笠可や梅の匂ひ香

巻の葉と知流しら波ち川春哉

うらひまち嵯く月毛仲も静まり

笠さらぬ身弘も満る柳うち

多くうれく柳よ 降るこの

度絵ふも仮名ふ志ら彩く 柳哉

[illegible]能奥乃院より士峯幽ふ見ゆ

孤免出て富士や孤地の初しのすゝ

象を琵琶 ゆく雲やおぼろ月

降るうゝや何をわすれて 中之宮

東花坊の新光乃屏風ふ蓮云わりて

白粉を逆しと蔵去ーて

乙鳥う来ゝう机乃墨也去孤

うらいまよ 迎夢 蛙う彩

天祐寺納

淡々と日も暮ふして自在竹
牛の角藤如意の色祢宜像
涅槃会や浴室ハ裸むし
尼僧ふ死さしへ行れはん像

風人を送る

晴ふ寒らく炉りこめられ臥陀佛
茅卧と昼ふかいれや夕雲雀

二月末の又日を菜種の祢宜ふらや
祢垣や菜を付る又雛の舞
ふるさとの山もかすみくるる揚
ふるさとの祢笑ひ出しらう山さくら

蕉翁の像ふ

芳野をんなを笠ふうやまし花の雲

蓮二と送る

見ふくるや花の上ふ氣をかうふる

高倉の位を保ち給ふ所義経が示現
墨染に伴連てうつの〻ふる八重櫻
散るを惜む老にしたりの幸ふる色
かゝる折ふし代女小對しく
園の名所笠を手苦しき乳の雪
曲舞の知やりいたの竿の鶴
三日月も弱くふる夏や桃乃酒
雲中に人乃琴ひり桃花花

此笠を餅引掛れて花咲ぬ
出代乃運や新鶴出て種ふまて
おうりの花神も乃りとや陸ちる石
義秋を送陸
持歩り巣や風景者よ旅すれ
清棠を表此静を咲ふ者り
山の形や乃を流れて乃うけ
蓑取人此掛く庭や義乃花

亀山八幡宮奉納

松の葉をちらせる神の御心やはる
ばるとはるく人とを送る
遥〳〵や大津絵ぶしの茶屋
仙人乃碁盤も指さぬわらひ草
素心を流す手八伝授ふ陶淵
手ゑ笠や祝と笑るとは茶屋
終蔵と城とをく

明春や横ぶも〳〵紀蔵蔵
弥生晦日田村川を過ぎて
光陰乃矢も射春や田もり川
営ぶ帰雁〳〵〳〵春日星
夏之部
明石加をへて出る秋給う郭
茶屋ふく
骨を仏法国扇を奉し文衣

ほのぼのと文殊摩訶乃耳の時と時

山家ふく

時雨 弥生 弥生 弥生 弥生 弥生

ぬぎすて一衣 弘月乃欠

夕雲を伸ふられいかとにたるを

清佛や乳を多く絲を比丘尼寺

色くく弘新乃雪や花御堂

後お袖に人のきろや牡丹畑

古山亭にやとり侍ふ卯月の末

いまさ雲られを

わきて糸牡丹の雨乃旅森ふる

波切寺一衣の間弘色やかにつとを

仲景警蹠ふ新鶯や 杜若

苟藥乃一味咲多り蹠者の庭

う文菓やとの多ち弘岸ふ咲

やうて刺児も杖ふや芥子の花

蓬ヶ庵のめしに雞の羹にてつとめての
日等を祭らんとてや一富士二鷹といへと
試みてをられぬはまちがひてやくさき餞
ちれ又行末を思ひ君子にあやかるべく
今更いふに成ぬもかつがれさるれを考ふを
子孫の始とて七十の壽ぶり
一句を送る

作の子孫子孫乃その子孫まで

同じく木會堂にて
牡丹の花の絮も蜜掛をされ出る時
紫湯屋よりあり変る日々日ゝ
山のけや蹈子のほ田ゝ人嗚
聞くに新兄会ゝ田植うた
和見福地ゆかりの神乃
八乙女を思ひ佩みたり夏神樂
ちつとさく上ゝや大河と一跨れ

追悼

藥師寺も老ひたる西塔寂寥野小
夕嶽ゆ蒙年ふるの影りハ古りしも
南天の老や古年ゆ実乃隣
甲斐りゆ沈をる人ゆ主なの猿
ゆしら来や人ゆ岩ゆ山大和橋
遊坂の色ゆて象を見ゆて
今やなく軍乃清ゆふ象の新
石山ゆ石もゆゆ沈ゆ花ふゆゆ

画賛

藤ゆこれの龍実雪ゆ蛍ゆ那
うんゆ多われも深ゆ影ゆ
影ゆ筏ゆ牧や青ゆ
東武へ越く人を送れ
雪の夢ゆ一不二ゆ川夢
流星ゆ糸ゆ就くや石ゆ賣

笹乃露酒のみもあらく雑りなる
蝶の羽も波打て通ふや花をたけ
春波の西国へ越くと送る
姫申りも鬼をあれ〳〵や茶屋なる
加賀の産物なる酒にやつて逢く
九重洲一重〳〵歩行申りなる
高野女人堂を参く
百合を姫申りをいふ名ふ花なる故
蛭子も、おろ〳〵人間なれ共
義経いろ〳〵孝行者なりをたふ
ろ〳〵高へ別れ時
めろ〳〵遠人目迎ちすを風車
撞子とんく〳〵や乳の張布ひ
撞子を暑い所あり迎地山
夏元
花よりも一夏きての愛 蓮乃吉

蓮池や　こゝ寺まゐて　土乃ゐのも

たゞ川風や船へ出れた　金炭蔓

兔の月は　時雨に旱も一時しまん

見ん不思ふや秋の歌ハ更なりけるか

月は見ゝた派に拾ひて広沢の月に

細流も僅ハさんふへ墓は桃の子なるも

かへしもゝそ宵の清明にいつまで春ほ

魚も芋君魚のかゝ亦らんとゝく

聚ゑ芋は下に角んと打つととも二つの

名に並へて凪名月とあん孫かめしね

玉も庵鳴のうち巣や　池乃月

鍬の簾従ふ扇も遊りしに

涼しゝ清き百里封しる扇なるを

すゝしさや夢もねまり　篭枕

夕まつ美夕顔白川見付けり

まさ袋ひ秋たよそかよ口山の懐かり

幻之庵あり義経ゆかりの地の由へ
いとへくもゆかしれ書の書に打八巨燈の
文字ありこれ漢のさまぬも
おもしかりんや平氏滅亡の末に数
の栄と昆弟と送ひ脱小帷子を
置森の芋と鶯き俚言の筆小美素
とゝまる事なり
除しきやられ置ぬ山もきし

雲ゆ嶺まこの山を交まり
ゑ壇城下をゝたつの山つさ多
ゑ面や智恵さぬ〳〵のふりもの

秋之部

渡青乃花吹消しを今朝の秋
秋立や幾も多ゆ湖子井
立琴に風も雲井乃ゝ多
ゑゝふかして裸や作婦人

そて琴や秋海棠乃風はつを
机をたしなやはるのあれもを
星合や橋と嵯峨とのかなた
秋もまさ稲葉うつれなつさか
宮り砧音もうすし函谷関
小車乃ちくやとも玉まつり

妻砧月傳

おもの月と聖ふかわけて
まつ雲ふ影ふ精やあすあ
名月や橋を落とも舟乃と
やそ流歌山とけ〻ほやの月
名月やちく〻砧も橋も新
名月やいかもの山ひ照月も
寒さ茶碗ふ眼むやうとの月
名月や菌毒もゆく仏殿もり
いさよひやりの多砧冒の関を西

十六夜や家出する迄の人多し
山雀や蕊まるく成まゝ放生會
松茸や生れ年つゝの法豆腐哉

亡父の忌日よ

ちゝもゝの傳小法華も和尚哉
庵の秋月角をあつまりり
秋風やものもゝわぬ人庵乃古え
庵の苔ち屋ち松山をまゝ書し

野上の里ふるく

蕣と見ゝ居れも落ゝ日ゝ
近付ゝ聞さあてゝ鶴り哉
八幡や涌出乃足をかしこまり

八月二日武蔵守殿ほうし人を悼
惜まれゝ年ゝそ入る二日哉
初厂や一ゝ屋ゝ文字ゝ冥
收屋ゝ仕ゝて一ゝ一ゝの数

代を三へ遠ふ[illegible]もよう[illegible]乃花

画賛

蘭の香を聚て春むらきりくも

山田居行くりくりゆく

藁ゆ[illegible]ふ[illegible]ふや[illegible]陀の墨所

夕影や秋を扇よの[illegible]

ゆふ[illegible]も拙仕[illegible]わけり

待青や[illegible]の松

[illegible]刈仕[illegible]田[illegible]うつうつと紫山子[illegible]

画賛

横平ふかく[illegible]や露乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八重菊もりよ九日乃[illegible]

秋の月ひとり

家々の庭の菊一寺の菊

世ゝ古き家の花さく菊の花

十三夜

盗人の来ぬ夜の月やとりのこし

夏蟬の乃家の小窓十三夜

一ゝ世界ゝ尾花のうへの霧の焼蛤の

乃屋一世ゝ世ゝ菊月の夜の雲

きりぎりすの武蔵野法師をいさめひとり

きりぎりす其庵の奥をおりふし

蛤乃跡の家記ゝり 柚味噌ゝ

海ゝ来て子も飯喰ふや 稲ゝ中

林間り 仁ゝも 破ゝて 乃蛤ゝ

未菱亭ゝ

松ゝ ゝ 猪ゝ むゝ ゝ りみち 鉢

月秋ゝ乃ゝ 乃紫ゝ

老母の喪ふ義ならば人のまこへ
明ふ義ふ木の義ふあれども秋の義

兎乃画賛

何ぞ吹ふ何を見ると雁秋のこれ
九月毋冬屋も白ふ片ふ片ふ雪ぬ

冬之部

赤ふ実の何く弱ふ弱ふ紅しこれ
実家ふ枯れ色賞ふ川時面

業焼くうち冬高ふ時面こと
乙鳥亭に招れて

金屏ふ乾くしこれ弱金ふ式
逢ふ忌や排子ふ片ふ蠅も赤川
枯芦ふ雷や弱しこと池乃鴨
鶏ふ冬立生乃十歳ゥ那
蓮池に招ぎ浮まく十歳ふ
風や落ち少歳ふ冬ぬ 冬弱 松

蕉翁の塚おもふ

夫雲なる 源氏忘るゝや 名仙花

木瓜花 月まゝ 我ゝ 花 紫花

麦まきや 一畝 畝 又 むらふ 風

素道が新宅と賀しゝ

京小豆尾鑓乃 ばくや 忘ひす 蓮

足 言 撫 ゝて 柱 所 花

門めぐる麦林の宋居と 強ひられ

世 花人を富貴小見おしゝ ゝ ゝ

隠れ家や 飯 不 ゝ ゝ 見まを 冬 杜丹

冬籠り 桂一 搗 徒 ― きり

枕 ゝ ゝ ゝ 此 屋 や 冬 籠り

故 文 入 庵 の 時

世の中の かゝり 翌け ゝす 水

吹 月 や 子 言 も 川 花 曲 里 形

笠 糸 花 隣 も ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

星の秋ゝ梨地よ峰やむ子ゝ
ゝ雪やまゝ打ゝぬ藪ちらし
風ゝ多し砂子果敷や井乃雪

大湊ゝゝ

雪ゝ人ゝ雪帆ゝ紙ゝ乃ゝ鈎ゝ獄
鶏乃ゝ雪ゝ乃ゝ雪ゝ多ゝ雪ゝ

小豆ゝ湊の汐干に拾ひゝ
吹ゝ雪ゝ巨蛙へ雪ゝ汐干ゝな

月影ゝ乾ゝく雪ゝ雪ゝ雪ゝし
冬の月白し豆腐ゝ梅乃花
蛍ゝ尾乃ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ
うとん屋ゝ人ゝ吟ゝ雪ゝ雪ゝ
雪ゝ菜笠ゝ淋しゝ秋八ゝ地の
蔓ゝ雪ゝし

めハ雪ゝ陸ゝ歩ゝ行や待ゝ武
木の陰ゝ雪ゝ汐ゝ干ゝ人ゝ生涯ゝ

獺八や梅も眼乃ゑくきとき
獺八や八形の蕨も山城出歌
埋火やあのつゝみ見れた昇りの
ちゝ北方うゝ中ゝの家内を
しのけゝと大原巾とやゝむ
ちうゝ求名弘毛ものやゝ
世の言を学ぬもうゝ九巾
紙子ちゝ見て居やゝ修平の長弧り
ゆれを知命ゝやゝまゝゝゝ
系数も百乃行前や中ゝ巾
もゝゝ北や馬も鳴く数の中
うゝひすも一ゝゝゝ言ゝの内
酒もちゝく餅も搗く多ゝ炉ゝ不
言外して表ゝ北結のゝ
隠れ系や初ゝり梅ゝを忘れ
ちうゝゝもいきぬ師走や角力元

雲井をの陰ゆかしきもの年ゆく市
俗ゆゑ紙子に煤を掃せより
葱一把明くるくやと忘れまし
中の内ゆのえんまや物乃屋

掌中蓼太發句集初篇

春之部

歳旦

元日やうの内のうも伊勢ゆ海
雑部より掃ものもはけさ乃春
筆捻ぬ松をそそけもそ祝
墨をもの又書盤ゆり初のうを
万少や愛八橋ゆ破くまく

又日の風枝とうとうとぬけ出て代の長と
むらくこくもの行所とおり
初申や十日を餅のさそそそ先
人日
摘ませて雪くに八色ぬ美菜うな
のうるを初賞ぬ代ゆゆし美菜摘
乳出ぬ風と出川よ抜く
ぬ中沢しも爰を笑座の美菜式
子日

此君とりふを紅ゆ小松ゆ郭
梅
むら咲やうるるものうるるひる
梅枝ぬ入ぬ入日式
世ものうや衣桁ふうて裝裝衣
社訳
梅香や風ぬ百度の向ちう
紅梅や狩のうちうも墨うに

紅を孫ちまてく梅の　とをてとりり

鶯

うくひすの九ツ鳴りて初春ぶ

鶯ぶ鳴そこまふくあらまけり

老鶯巣

猫居しく鶯ぶ親見ちえん

鶯ぶ音ふふく気ぶくを

柳

二月三月新吹入除や野さう那

ゆりふくふ小枝もそきぶ柳ふる

此庭へ絶々這入ちぶ庭ちぶ

柳ふくく柳ふしいとおもひり

揺ふして踊ふものふ柳ぶ

震

洛陽ぶ名物ふきり雲ちく

ふまきてふやおもふん芦の震

寒閑

雁なく海辺遠く秋ぞ来

寒ふかく

夕霞あさぼらけ鼓ゑ雨ふり

春月

天に丈隠る月秋の那

朽ふしの鶯もさし鶯月

霞もうく霞うく鶯ふり寒月

猫恋

秋山もあへし秋にこの恋

濡たる雨とこそ人よ猫の恋

波雲

波雲や例うき文恋日山

波雲の陰をうり乙去夕の雲

春風

春風や一度平野雲の牛

春雨

覺めぬれて聴けば春の雨
双六を延べ去りかねる雨
素面や拭るものゆへ養ふ
大井ゆく
三井寺に滝きく素の面 秋水
陽炎
陽炎に揺せてある屑火うな

濱松屋崖
岩角に蛸ぶらさげて 桂う郎
風巾
きれ凡巾丹を面に浜辺の巾人
海苔
素海苔をとらさげて白し磯の波
菊根
陰婆ゆく人城笑ふ松ぶる稲山

雉子

綿木よりその尾をる紙雉の姿
をもはる佐賀に雉のあふる

涅槃

祢をん舎やおられて初ちる花の蝶

蝶

とちかく化しく先に燕そ

雲雀

鉦風や きく一きちよあけ雲雀
むくの家に家に落ちをひちる

雉子

きぎす子や余をよち縄を逃まく

蝶

蝶くや乞食の姿ちりしき
はまむらと邪時嘗を逝る蝶

蛙

修験の相見をとゝやゝかゝり
祈宮の敷〳〵あえる蜻蛉
堇　野の菫
そゝ〳〵ひく牛もあつう〳〵堇菜
春至
春日や門伸〳〵梵論の新法師
八橋
杖ゝ〳〵春やむうしの傷ゝら
大磯
祐成の情〳〵しき春の敷物うゝ
苗代
秋風ゝ二茎ふゝ小菅〳〵苗代田
雛
桃樹白髮の雛もあゝまし
消〳〵ゝゝ炭もゝ炭やゝ敷の雛
菜畑

きち屑も女ちりけり茅巻俵
下茅の桃こそ見れば蓬もち

沙干

脚り返る女こそ孫の沙干永

出代

出てゆくや宵の月へまくく大男

花

おもくとわせく花の枝ゆ

見かへふちりぬまこと花の陰
分ふしてこそ高き雲花の面表 鄙
芝居皆やもむしてもおもし 花盛

芳野

ちく雲やちる時花のよく世山
梵工屋とりく
めりくしや芳野とりて花一本
花吟ふ鶯も乃ぼれよりの川

芳野大滝

ちる花をせきとめつゝ流のこゝろ哉

苔清水

苔清水花さそふ風にけて結ひ乃り

初瀬

ひとゝ世祈るとてや峯の花

櫻

世の中を三日見ぬ間櫻かな

我宿の櫻見すれてゝ乃り

別あるる春の名ゝさそふ風

来ざるを又奥よ世ん櫻かり

去ゝゝく芳野の山中よりまゝ乃り

はるゝ乃ゝの花の色ゝなほもゝく

我宿の河岸のゝゝ文書けゝて

ひとゝゝゝゝ雲

櫻う那

岩ゝゝ見へとちるや山の櫻

うこゝを月こそ出れちるさゝ

弁当ゝ美月ゝ歩月や　山ちゝ

海棠

海棠やおゝれゝ来てもさゝめく

海ゝゝゝや花の年よりすゝ西葵

鄭瑠

旅籠屋の夕ゝられ雨ゝ法し式

芳軒

芳軒の鶯ゝゝ　翌日ゝ

ゝゝゝゝゝ弱のひまより小鮎

義

投ゝゝゝゝゝゝ色ゝり松平義

立ゝれゝゝゝゝ月ゝゝし花の花

彩春

夕雲雀ゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ波ゝ彼田の稿

何ゝ春ゝ笠ゝ八重ゝ　ゝゝ

夏之部

更衣

櫛の目出るかをしの衣
我こゝ緣ゆゑさまたせて衣さる
武士ぞ矣とせてこそ捨くれ

白重

ちさゝこそ野ぶの髮や白うるゝ
白ゝれかくさ脊中こゝ物かゝん

郭公京ゆて　嵐山ゆく

若ゝくめ寄や清ゆゝんかゝきを
二の巻ゝそゝを花ゝりかゝます

箱根

雲踏ゝ宇日もさゝほゝ紀す
かゝきす　明や氷室乃　一重
をちゝ森ゝ森ゝこの名ゝかゝます
かゝりゝよ名ゝさゝや　郭　公

かすきに巣を離れて出る鶯
一とせ示三つの春ぞ山んや はやくきを
木陰して又拍子あるにかとるにすす
世を警ぬ不信もかを法に 鄭玄

灌佛

山寺や又色つまる 花由堂

牡丹

月を訪ふ影に牡丹の白うす

樣ちる果や不あんの香ぬけ
花ときを面かしめぬ 牡丹 久

葵祭

葵小傍を木のえをとを 弦久

罌粟

ちりけるを續くめるき丹 秋弓

麦秋

乞食せん世をあとうあをとう麦

旅深してちるや麦の秋の暑
麦の穂も出揃ふ　卯月八日哉

筝　鍬

牛の子や花ちるさとの男達
ふるあめや花ふるさとの和らかな

鄭

雅よあう宿りて花を鄭
洛のふち伯母さうそや鄭の歴

花柚

性光をふまへてそ形花柚哉

下閑

下閑よ乾うぬ閑伽ぬちの水

分延

山の茂や妙光一字より

宇津山

著示乃哲つく越るちけ世ろう

蔭雀　水鶏　翡翠

うきすや湖にて　次ニ出ル

日やけ田に　水門はけ　水雞か

屋ゝりきの花ゝ　蓮に翡翠か

新茶　梅の花

唐土のさもしさ見せて新茶か

ゝゝゝ洛よりゝ

端午の葉　粉粽　宇治の新茶か

宋呼子

我丹ゝゝとゝりさゝ　うんこ子

竹まし　木まし　卯ゝりうんこ子

螢

うしろゝゝ　猶ゝ　中の螢うれ

追ゝくハ月ゝ　ゝるゝ　ゝ

端午　菰　波　少ゝ

懺悔の果ゝ　帆　怒　船

百疎蹟

疎々けく蹟を書るり　八日月

競馬

翠簾越の雅小藏りんてを色る

思ひの石を見るく

えてのくや いさ帷子のふり

八月雨

月夜やわる秋を忘るる雲の月

秋ゆせるくはるる花ちりあり夜

川越る日もあるちくや皐月雨

多ノ和川を侍勢飛の二郎をくめて

まんえたくを西とうや三ノ小森夜の夕

晴もうれしく

紀の月小金ノ和川や皐月きれ

田植　住吉侍田

乳母あ松武蔵国の乙女てめくより川

外のあやのうとなるもなりなる

ありくるや

弟苗やりく弧うさ水の春うく

二反程のやうなる屋を結し出山茶
上田三反味噌八斗小豆五斗ありよりの
よれ米とある孫師のれいを取出て
そこふ商家の名乃たりられて

玉苗より門田植けりいくよ條
山路や人目あらそて田うへうた

田植

山郭公脊中ふ立て田植哉
植いそぐ夫婦なりけり田植哉

蛙鳴　蛙鳴

とちらかしたるとて蛙ふ今手牛
蛙たゝひや手子よ儀子ふ田りと
つのまを蛙や寺もちより猪も木のうろ

蚊帳　紙帳

蚊うとまる森ぬ里の蚊帳りれ
蚊屋大やうう四隅しくも　松の月

紙屋寺

尼寺や百粉も散る菊

高野

散の居ぬも浮世の外や桔梗の花

我唐も紙帷子せてゆるりとや

業平の初てきる紙帷子

貴船

菊供る思業の外や美人参

名のたてるものや葵の六月

花うつぎ

里人もうたれさうも花うつぎ

小倉中山

紫陽花や擦れ違ふ馬八ツ橋

紀州熊野

荒磯や稚子とうたふ親もも

泰徐福古墳

稚子ら唐でやもとも源流り

氷室　祇園会

六月ばかりもてくこゝろ那
紙屋を今や糸をゝ日かさの下とり

竹婦人　簟　蚤

まゝよりあひそめうり婦人
曉を小町うはわや井戸婦人
物載よ風をゝ見られ寄りひろ
客時りふん遠る巻のり来武

團扇　扇

あの手ふ　うちを寄ふや　小形城
柱つけの四つ〳〵ん　寄る團扇ふ
独南の跡を扇　ゆめ〳〵れ
いまけなさ子よられる扇を

清水　拍り柳

初ゝとひ腸流ふ　清ゆう那

自得

晒月ゝを　惜ゝ　月日ゝ

暑 西海　　夏月

弦虎嶽をもあらそひて暑う那
耶山より市のものなり　夜の月

沖繩　縣　雲峯　夕立

泥人の凱陣うたて　沖なまり
雖奏功の字と聞もうる耳もうる
乃海ゆるかとつつく日あり　雲の峯
夕立やれ合傘を時々の

納涼

岩陰ふかうつやとかの　夕　さく見
涼しさや寺うち碁石おきうつり
木蔭弦落葉焚ゆうり　ゆかもを

祇園川　岱

ふとこ舟へ入まる帆あり　夕すゝ
白隱禪師相見　蕣花る

涼しさや冨士と和尚と田子の浦
ものあるうち能うと冨士涼し

下総国
下総の関を原　舟や　申さるん
麻行う田家ありて
牛馬のさわもちりぬ夕ぐれ
比奈の原
阿波の原　扇の立葵　海葵かな
不忘山
かゝる日もをもたれけの山陰し
伊勢
人さく　陳見えり　伊勢川

秋之部

立秋　一葉

秋ぞ　一ぬ　ゝ　面白　雲下　ゝり
出の音　下　前　雲や　ゝ　乾　乃　妹
忘れは　秋　ぞ　乾　ゝ　ゝ　ゝ　那
暦ほと　音　ゝ　ゝ　相の　一　葉　ゝ
ゝ　ゝ　て　琴　ゝ　ゝ　ゝ　相の　秋

七夕

四やすさ蕣はまん星　初て来

鶴や松　千めぐりてをつし

仙府の人〻千とせをくれて

出居して星の一枝よまうへまん

七種や葛よりうめて　蔬千寿

秋草

蕣や秋を知らぬ　たのれあり

我ものゝ色を折くさひし　女郎花

吉野ちらし

吉野の井や底を子弱の去のふさ

蓼の花　嵐のの雫をさうれ

淋しさの折へうれ子すれなな

ふまをかるもかくてふさひし　瓜

魂祭　燈籠　躍

世の中や朝もふさ民むまつり

人のをく家〻ちりはをむまれて

秋くれ松ふ　秋あり　言地蔵

蛇籠やそとつくる風の秋

秋風や人まの赤く躍る那

飛くれて旅人高く打たる

稲妻　螽　明子　添水

稲つまや園さへ淺てふ破の実

いなつまや枯の秋風のかくまて

刈跡の落ま手るいなこの那

落く居る身のうくやの明子引

秋風の子を切うと添水那

鹿　細うこそ減して添水哉

稲　筑府竹林精舎

試おろ推やそ花瓦又器一を

業陽花と又器を盛てを筆ら

この二句を交毋うて

刈のく乳田つくも焼し又器一を

蛍

十そうり耳あるく秋なり蛍乃ら

蛍の夢や居ろとけて長況

冬瓜の穂さきの形きりぎす
蜩や蝶も淺き夜の秋の夢

秋風

秋風やうつるあるじ一墓ごろ
秋風や行羽影ふ胡蝶の那
茶又畧

山を出る川あれあり秋の夢
仙春あるを居留別
名ごり川畑のあるの素乾あるとき
ゆいの人のむらの面影もおりいもく

跡先のあるさと拾ふ秋の夢

秋浦吟

秋風や渡もうひくくれまくき
必親を人の宗亭ゴ日の殘暑を言れ拾を
干さくめる襠の衣ごり秋乃か歩

秋柳　花野　秋夜　嵐

いそうりや拾ひ乙しくくちり柳
ひらく壁よりひらくる花野分

合歓の木に拾初ろせん　老の秋

白露の果をあらそひ六玉川

秋蕎麦花　蔓椒　瓢柿

瓦屋を一里〳〵と秋のくれ

俳諧さまの目もも後脱や蕎麦花

俳諧の乗合おそろしとうとし

うう〳〵まさる花のつる　ふく〳〵ふ

柿荒〳〵時りく柿の木末れ

屠　小雪　結青

卯丁や　小雪と落葉あのうへ

動よりの二羽　ちちぬ屋も寒し

崩〳〵ハ〳〵へ　ふかせすや　百千　青

下総浦にて二句

野風や小花のうつる　うもせくし

鶴鶏や　澄来　ちへて　岩はくれ

京歌ちくさ以前　且つ温泉の山よりと送る

月　時をもち　向ふそ　あちち　むけ

良夜　十六夜　和泉

月を出づ月を入る野山の入歌引
宿月ぞさすして照る宮間の
さとの人もぬ歌とりの月
名月や巣をもる雀もすずろ
名月や沙汰なきさまも趣
名月や称ずるも見えて美ふる
俤八幡八百屋の門やりふの月
十六夜や古びの園の楊まるく
ふの沙や竹の裏り人乃夢

蹴鞠　弱逸　相撲　歌麿

金屏を面吹ひるく蹴鞠ける
議人の手里扱ふも弱むる
弱輩や日やけて甲斐の黒おの
大内形術ぞ古輩や相撲ふる
ふ月ふふ炎ふ人ふる角力丸

女房と指貫指れりとそうふうり
寸分もまささ菖蒲の葉の長
竹夢くく枝樊の葉をうれ

菊

菊くくくくもさきまるや菖蒲の花
そのいとは宮と亭をと白菊と
仮城の枝をそや菊はくもと
あの菊のようちる石の根 岨乃菊

木曽路

菊ことふ 祖父めるる菊の山路の
後月 菖蒲 葉 うち結

若の人る菊ちあり や 十三歳
明はくぬ月 明あり 後の月
金沢にて
限くを海士の樊や 十三歳
影菖蒲とこそ 盃の菊のち
影をを生義く 稚の音

葦狩や月の干潟の小松なる
うゝ牡や迎ふるまた九月櫓
うゝ枯や月の袁ようも見のあれ

紅葉　孤

九重も中なる山のゆきうれ
掃ふも雲へてさびし夕ぬ紅葉
散落くゆるさうき葉の紅葉哉
見ようゝ年波をもる孤うれ

茂睦氏の家を眺ふて

もさ風ーさ長月比孤光うれ

蘆　新酒　濁酒　落水　九月尽

蘆弱ゆ子弱ゆおろもこの川
山葉と子雑の候ふ松て
新酒あり孤ゆ郷の雨屋せん
隈ふさもの〳〵ゆむ初れ水ふう酒
帆のうゝふもの母ふけり落し水
秋風とふゝしの出帆へ帆式

冬之部

初冬　時雨

初冬の機織入てやこりそめ
挑灯の松よりくやゆかしくれ
秋風の翼のとりて初時雨
色久ぬ紫ふかい霧なり初時雨
雪の笠さうしろ[illegible]しくれ

小春　十夜　口切

山も今撫支の姿小春の那
冴返る日まそらく弼く小春哉
我家の波安くまちなる十夜哉
口切や苦味の價小唐あしき

落葉　枯柳　冬牡丹　枯蝶　鶏鶏　冬蕨

又まつ来るもしらえぬ落葉哉
枯柳花はかけよりしり
富りとくまてとのうくん冬牡丹

牛の尾弧外ゑうこうぬ拍聖うる
夕ゝれの藻のそうれやそそうる
庶与年先伺詰ん梅也おすり

帰花 巨燵 風 水仙 繁市 紙子 衾

おりてきる地そのまの君を吟り花
猩猩ゑく沢ア拉やこてれ式
長羅して巨燵も閑る寿表式
ホクしや影四月ゑ八月記也

河牛の移ゑは流沢 多仙花
きう猿ゑ生句別て以中れ
似燵の市ゑうれて 臥中ゑ
客六月日の果也拾ゑ六月の果也先ゑ
客ゑ来ゑく我ホ書わる紙子う形

老鶯巣

戸さゝぬを我弥 帰ゑり 紙ゑする
茉大根 蕩見んゑく 老を平ありん

祖代ゑ 暖ゑ 教見せ 鶯巣

世をこのとつまをくれ綱代の
所とそぬらもめいはまぬらめとを
ひるの時を一さんの蟬やぬく夏の
朝月をや百舌の秋も菊の香
發句や郎と蕉肩屋ま
東水佐ら岸撰火水香
城立の門角くなり蛙の聲
障子ふるこてろ水

一京しこ八八日乃地蛙の那
文る秋や岸もて岸をなく音
ひとの火や影上佐ら老ひを
水香 影
蟹蟹ちちりや蛙の右むり
子香峰秋や名月は照のし
友ふえて月秋の影蛙以秋
吹上て沖ふりのちとり分

雪　鉢扣

ともしひを見れハ風あり夜の雪
降ら〳〵と音の夜やあら波
簑て川雪ふら〳〵や記し川まゝ
雪折川鋏川棹さす小舟かな
白雪の中に折ともせ聲るかな
戸の外星さへ〳〵して柴の雪
鉢たゝき月夜に見えて哀なり

煤掃　年毎残翁の一つ宿なかりし橘叫
ちらく居をうつしけく
袖の香も箕裏にも伸へ　〳〵　桂

年内立春
夜来に冬　年まれ并ハ彼の家
詞く耳ゆかる者のひ書に記より
森覚る草庵のうち
三絃と扇山にも西やとらしの冬
我等の庵ハ家家の肆よりくまて麓鹿の
猶ひを素る猶もへより
全銀の字年拘く序る　柳之るる

春之部

歳旦

初霜や又市二位甲斐ゑとり

若水や年ゆるぶ時乃人ゆ張

とゝ彩の春 ゆゝの 之枝也付ゆ

年徒の生形をてゝひしゝとりあゝ

彩ゝんと鰯雲のゝゝ去のゝゝ多ゝ付ゝ花のあゝ

不のを生しゝゝさ

淨破利の弥ゝこゝの尋 師走

節分 室町

鬼ハ外 ゝゝを見へとゝ者ゝ

厄拂 ゝゝゝゝゝ ゝゝ 月 ゝ

ゝゝゝゝ 紅 嵐ゝ ゝゝ 一ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

風 珍ゝゝ ゝ 名 ゝ

なのそをかぬ國いきもくや福寿草

東叡山のもくしろ拾遺とゝ名ぬる藤

ゆきもとけぬ蝸屋とゝ名ぬる藤

ぬるゝ雪のまゝにうるゝ花を愛す

おもゝ孔雀とゝ名ぬる藤

ふりのまゝの孫をさゝ入れる見

聖代

初霞若柄の極でも かゝ原なり

人日

若菜そゝ日とゝ名ぬる藤

沢蟹の殘もうこくをのゝ水

猪肝ゝ山掘起をとゝ名ぬる那

削魚

正月も彩をやさしく 削 の月

梅

梅の書に出るを見む時 多 古書

ひらゝくや 石 ゝ を 厚 こ 有 り

咲かゝる梅くめしの日数哉
待ふ程ちまち和哥よ白ふや梅花
三弦も梅樹付たり むめの音
香ふたゝ山くに花まさるの梅花
梅この方ちゝ分よこゝ〳〵ぬ梅を伽

別離梅

遠くも此木遠てや むめ花

當

うゝ人すや月の見のこ日ふ元
當の彩隈さゝ体を何言う那

春眠

當の中年戸明ぬ起う那

抑

むけとてたまを寝よ抑式
寝抑やうり〳〵光の一日さう見
いうちれてうふうう抑う那

緒をとまるぬるさ哉

都にも市ふつまる柳哉

鹿　彩藻

馬借くかまくらくまくろ

大井川

落葉やあるもの人は大井川

大和彩　御　岡別

うゝろふも哀なる鹿の音

春月

南〻〻出さうもたゝくに　おぼろ月

駿河の国彩御　一乃氏女の琴彩

乃ふ拍子

ふさといふも笛ばかりや春の月

雲の月　撥ひと撥　初ろひ哉

猫恋

我屋の老猫またゝれて

焼月ゝいさりひさん猫の恋

おもひ春の尾よ蛇もしら猫の恋

白魚　雪帆楼

白魚やそれとしらるる夫の妻

しら〳〵魚や波まけの屋敷ちら〳〵

雪解

雪解やすりく　百八十ち

余雪

砂このゝ所〳〵雪乃雪さ式

春風

作と多う詰伽羅むゝ春の風

素反

秋嶋ゝ傘へあるや素乃反

春反やたゝつさんまを松の雪

雪原の反砂よ清く　仮名うん

風巾

きれ巾の多越ゆくやまのち山

海苔

彼此乃鉢夕やうに海苔二枚

仲春

松梅と苔て正月二月　ゝ郷

神事の松をかけの二月ゝ

紅絹裏のうつまを縫むゝ水田ゝ

菜摘山

菜摘てむすへる山乃笑ひゝ

雉子

雉子の声や揺とふる雉子の巣

たまゝ小ハのふ高さ雉のほろゝ

雲雀

秋もすゝ雲ふ雲ゝとひゝゝ

菜の芽よ落ゝく麦ゝ雲雀ゝ

蝶

梅木原の蝶ゝ切ゝる蝶ゝ

[illegible]

蛙

[illegible]

亭子院の[illegible]時[illegible]

[illegible]蘭又[illegible]も荒く埋[illegible]

富士根方[illegible]

畑[illegible]や大[illegible]内[illegible]九[illegible]

菫

人[illegible]

池田の宿[illegible]

[illegible]の[illegible]摘[illegible]菫[illegible]

菜花

菜の花[illegible]大和の内[illegible]

炉塞

炉[illegible]二日[illegible]

雜

三月ばかりの細雪も雜の月秋小
はれくと月みたくさまの雜

胡葱

胡葱や小町の小町うねうねと
めさつさやらう潜てもも　女文字

桃

桃咲くや牛のうんもやまと哥
出代

おこりや飛ぶ井蘇る　揚町

花

長家さん秋ようさそあまた　花さうを
花咲くく形永さ日と成よりり
のさかりより花よ長むむ　春の雪
成佛の棺ひくらん　ゑるけうり

東叡山

雲雲や世ふ子ときて花切子

洛陽

京一首ゆゑ山ちか花の雪
傘さしく咲うく花のみやこ哉

旧邸

忍ぶよと花よこうて雪の庵
深草の政左墳

左ふ花ふ法の杖あり作之助

櫻

ちる櫻孫ちる人ふ信と花散
拙惜む老よりよりやちるけり
秋さらや三味線落く人通

義山居

櫻戸や綾まつけぬ猛つひ
日暮てはちるのちり山さく
ふ厳弘凡ちく方そちふ櫻
ちよりち弟よ陸ちし義けち

麻辰の如月ちの日嘉を美ひらく附

ちゑ果てく方丈と出でう　嘉樹

鄭濁　麻殆ふく

藤の代よ成て月よるはくしる

若鮎

若鮎の小方丈にく逆より

山吹

山吹や旭ぶまく美て白く

山吹や月も弱く沈あるを

苑

山寺や一日ふらぶ新ぶらし

仍春

切まや一枝りまるまるまるれうり

夏之部

更衣　多群と落ある枝と成く

いさ嵯峨も白くまるれ衣うえ

財政窓より隣りく一巻寝ありよく来てう句を字佐山の持んとまくめくちの
涼切なりく写余里の労ど古る
先門の蛙より用ありこゝもうへ
若紫
雪晴くゝ古りん方なる美紫式

郭公

又ぬ書をこゝろれ歩り就りきす
見くゝ雪の墨ゝや ほくきく

郭公一声の夏をさゝ先けり
耳ままけくゝ牡丹より郭公
泊くゝ家懶くゝ出くゝりりくゝ
行梯くゝ森こゝろあ充やりくゝきす
雪新より雪ままくゝもりり 郭公

牡丹 昭和四年二月廿六日涼川芭蕉庵
再興成就の日更雲義十七回忌を
まるさくゝ

元こくゝく牡丹を蓮のうて形ん

白雪に空申りをへくれんぶ
ゆきまうして ゆる 桐と 牡丹れ

青簾

凡さをを意のうしめや書すれ

杜若

何ものか冠に差せんかさりもさ

懸越に侍ハ書ゆしかきはさ

荔子　雑

一富士の頂ゆくこうやうり荔子

面白に書なき書や 初かりか

筝

筝を申り出まして竹のめしを

竹の子や高小刀せて亭をり

鄭　大磯にて

鄭に孔子もまもれし虎を

いくそんと見ていひうん すしの仮

花柚　葛飛山人の海上にむかひて送る

柚の花や　三湯にくく乃待百篇

或人のまのりふ女のこてる貝ふらまて
はたらうる童の形そさうう柳ちり
小舟こいる柚コ似付けるを見て弱をれて

二月ちさの花柚も姫一星紅毛

一枝をもしいるる花柚うれ

実梅

実さうくやかをを軽りき青飛山

卜園　黒塚

素子さん歯音おそろし　木下雪

和布浦

燒う移る繁ふの茂ち　和布浦

後鳥羽　帝御門廟

百官共　言こ　俄こそ墓木立

落雀　水鶏　翡翠

源家を市こそそけもきうくし

菰葉の奥を見ればさ水鶏哉

蓮を居く蓮を捨て翡翠哉

川蟬の風うるさくなりにけり

後の句あり子蓮子芋の湯の舎と言つれなる茶菓の一興あり

三伯うゝ花なしい所苦哉

浪くも温泉の古反や苦哉花

相花

酒桶の脊中ゆ見や相乃花

蛍

行くゝ小雨の末法むはうるかな

傘さして蛍狩する雨哉

雨の蛍乃計り川うるゝ蛍哉

端午来て

ゆくゝ河我も持まく粽哉

老世うと古くも来る塊郎

五月雨

竹部より出初日へりの月の面
はるゝれや雁鴈ゝさらる芦の音
檜を漏る音 暗し皐月雨

田植

松小日をうゝひ出しる田植哉
を里や二筋三筋田うゝかる
部りして月より淋し田植笠

青田 南敏賀古 高麗染ち

あゝ田をゝ青田小照しゝ京の糸
青田さゝ〜深寺弘 右部を

田草 若竹

秋の来る左法ゝん田草とり
それよ競それ小ゝ人ゝ〜〜〜水
笑を出ゝ蛙しゝさゝ之ゝ竹

鵜舟 照射 勺兵衛

鵜つゝひや 鵜ゝ松ゝ小舟 拾小舟

新も鶴丸城をとくとくと鶴鳴ぶ
祐成の行末哀れせぬ聚射うれ
時致を山のとくれてとり名
牧者
張家に筆とく義多浅敷ぶ
牧ぶりして後秋くと星の月秋ぶ
白骨観
夏痩のうつつさくる孫笑うれ

夏草　庚辰の春京都をうつあひて碧
南孫更仙の別荘あり
扶桑　さくけ這を陸奥とり水
豆の葉や動とり撫ふとくふ
動るうやたくむ波の春
豆影や鳴るう咲とく春とくく春
夕の庭や空地の日ぶ　即菩提
藻花　凡
藻の茎や隙おさ水の中とくく

たゝぬきの瓜むく新のかゆ哉
瓜畑やいさ云やくと暮まゝ

氷室　祇園舍

六月や撰て初るや氷室守り
祇園舍や人をもてる焼の落衣

富士指　白河関

吉野隆宿より浴衣や富士さゝ
片神を秋の風なり立ちろと

竹婦人

蓋生や子ぬくひ然る竹婦人
七符とも三符ともいはゝ作婦人

園扇贈　おのゝうちちやとれ七月
書て新れの後の墨扇や

そのまゝかゝ小舟ころ白園扇
清水より東武年ぬくとて

我新小出ん人関の清水うれ
涼——さ八子弱なるとろ昔清水

家ゝ川中小流々清き那
山伏の波はしらく明清き事

暑　市丸

三味線をうゝ臼のせゝあり
大津絵丹波ぶしなる暑さ哉
かゝ小拍子ゝ孫作ひむろ宴小撰と屈
してハ笑味ゝ吉寄もれとも拙なる
我庵の夕ゝるんぬもさとおのひおれて
帷子や的ゝ風あり相なら

負徒翁旧跡名称日相寺
夏弦やもるとゝ雨傘のあ風ゝり
悼吏登翁
六月を経帷子ゝ名残れ
一周忌画像賛
秋ゝ来る人のあけを涼日ゝを
三世長
仏ゝ人もなゝゝ六月の紙子ゝ哉
石碑建立
三伏の夏ゝく石の虜の那

蓮　夕立

菅笠の新うら蓮のうき葉哉

丹こまるハ茶とそそ紀り蓮の花

中ふくらやゆ地ふハ吉田の藻せけく

納涼

四辺とゝ水ゆ涼てく納涼ゆ

町の燈ゆ涼とゝく揺や夕ゆ涼

見代丹行技のちゝぬすゝれ

六祢宮法樂　僧ゆ仰ゆうとて京中を巡すれ
平野川の流と陽ゆ行ゆ

我影も境内いれゆ祢源

数ゆひ武隈の松ゆいゆ

手老も松のおゆりゆ　下ゆみ

清秡

白鷺ゆ鳥帽子姿せゆ秡川

秋之

立秋

流ゆ茅の輪ゆ夏ゆ　けさの秋

過ぎゆく秋のもえやけさぞ秋
なけれかの書きかはすより一篇あれ

七夕　八日星

星の年琴の音聞くあり
青月や書紙あかの書くまて
星逢ふ夜雲ぞ隠れ
立琴も涙せるや星の二日　碎

秋草

なさうしのうや動く
焼捨ふ夕ひ多てり女郎花
荒牧ぞ中年痩
阿房宮賦をよむ
鬼灯や三子人乃秋乃ゑ
招風ぞ宜を振ふめる為う那
魂祭　梛籠
月見れ人の新たりおまり

七月の野辺をむくと
迷ひやすらひふまをぬるの、新
氏容〻　懸佛　〻〻さそ　夏河も
燈籠の中うさひ〻　揚燈籠
稲　蠶　呼子
夕風や　霧もうとく　稲むら
奥州　壁田玉川
追〻〻　蠶　見えや　川子鳥
引めけく　私の月　秋や　呼子　縄

案山子　門涼をるる
楠のうろ　芋ほうは　このしろる
人生やもの　芋ほ　案山子　歌
秋蝿　蜻蛉
飯をまた　這〻　秋の蠅
うよ見まや　秋のうふ
芋所て　去年　芋まりや　わさら蝶
うこて　芋の日　おさへて　蜻蛉

虫　雪

日暮るゝも鳴ゝ弾ちり虫の声
眼をはなす蚤森ちりちの蚊
我影の爲ちゝ為ゝ歌やさりくゝも
ゆれ咲ゝ癒れ虫ちりきりくす
人ちゝ命ゝありぬ きりくす
光来ゝれ搗 松しまれて ちりさりちより
夕雪や ゆゝ ちの子松しま

秋風　花野

秋風や人ゝ ゆゝ 砌 のいと
秋の風美蓉ゝ敷を見付ちり
追剥ゝ秋ふゝ ちる花野哉

秋夜　順子　露

宿借ゝ森ゝあちゝ次ゝの秋
流伤湖水
秋の水ゝ冨士を ゝ ゝ 狂歌し
ある人ゝ ゝ ゝ ゝ

唫てゝ見る七夕川や鄙ぶり秋

上総子持濱

ちゝ波の深さあるうゐやゝこゝろさと

農家より八十の老ぢゝ笑しく

菜の秋粋ありけるる翁この那

秋暮　澂見坂

あるゝ海ゝ見えし秋のこれ

暮ゝ川ゝ見合せる秋の暮

眠我ゝ墨水ゝ

木母寺ゝ力あり秋ゝこれ

家居ゝ客ゝ秋の暮

吾帆樓

指ゝ帰帆ゝ孫ゝ秋の暮

吾銘も武寺懐古

襖紙かゝへ秋ゝ

雪　小雪

二羽ゝとゝへて悲しゝ落ゝ

初雪や平ゝの家

連花や [illegible] 松乃井

駒ヶ嶽一荒見山・[illegible]山

文殊寺納

山茶や文殊の碧恵のむらさき

武庫山

武庫山の眠さうなる雪

芭蕉　柿　待宵

さうさうとして来る搗鐘や [illegible]

深うれて我と別るる秋

濃柿や代々の家ふる撰び

行雪や [illegible] 如舟

良秋　二州橋急撥石別荘　十六夜

のつ〳〵かつ〳〵手枝の粽や [illegible] 月

川家よりあそひて

浮雲毎時子初 [illegible] 乃月

保川舟遊　月の友とて紙器の

川上より [illegible] 本数も [illegible]

十人の舟見の友や松初 [illegible]

麻布

[illegible]代の宿[illegible]

[illegible]月や[illegible]

名月や[illegible]

名月や生れ[illegible]

名月や月より[illegible]

名月や[illegible]村の松乃月

名月や[illegible]

一谷

[illegible]の[illegible]

いさよひや[illegible]

野分　相撲　[illegible]　新綿

岩端の[illegible]

眠江亭

[illegible]子や[illegible]

[illegible]十[illegible]酒の[illegible]

里を今綿[illegible]

菜

白菊や花のこゝろ[illegible]の雲

蝶[illegible]菊[illegible]喰入[illegible]れ

ひとこゝろ[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]

澳村重湯

魚の名も菊[illegible]

婆心公[illegible]

[illegible]菊やめ[illegible]

白さうも浮世の[illegible]

後川　尾張鴨

白魚[illegible]

稲[illegible]

尾を越[illegible]

紅葉　猿

人[illegible]

流汐秋[illegible]

花[illegible]

[illegible]

屋ちりさめりう
屋ちりもき冬幹を花瓶に初紅葉
月ふかく深月の傷や小夜きぬぬ
鶏さうう茶碗年孫乃柏子うれ
めるもの冬嘉年いちりて
歌嵐や翌弘抽味噌も精ちり
登ちけく抽味噌のうう冬歌
麻　蕎水　九月尽
生ちるの系ちそきけ麻の夢

綿ちく歌四く秋を搗ちり

冬之部

初時雨　小春

市中を朔義深ちちれれ
夜庵

傘ちむ寄ちそちれ初時面
ちち歌見生えの繁庵する時面
歌ちちう我ち難ち時面れ

祖師堂の忌日しくをかまくら

菜を踏くくおかすしく搗む小春哉

後河の人くよまる時

身をくるしの寒ちるまり　小春風

芭蕉忌　百回忌を七十年の今日まるにて

深川、安はるる俳諧道の初うる和上

人の発の信ちそ我死んと俳せられしを

おもひいでく

我稚子小まくの市もや　十二日

後河藩や忌摘も菜の白ひたりし

桃舟真り真り真りめりく

ちをぬるるや仮を西りりの茶と漆ん

掛川より藩れる布せるひく

冬枯や人丸の墓ぬ富士まろも

新冬

さびしさの眼枯れ方や石蕗の花

十月のめくいそうや花もくちち

ちくくて罪ちくさ菴の干葉うる

枯柳　冬牡丹　枯荷　鶏頭　冬篭

枯くて月を柳の淺草の那

妻ちく栄ちめ戸や冬ほん
ちと見ちく一里八寒ちう拍毋ちち
見ぬかりる物拾ハせん みちちち
おうひう〇て月月ふ歩ちう冬籠

帰死 火桶 巨燵 ちちし 炬燵

表面ともりふ月もあり 梅見花
ものあるかくうつくもロー 帰花
こうれ春る宿安の中る火桶る

拾ふ物ちへふちく色 こちりうふ
風ちこうし梦ちちたのさちを
子春ちううちう月夜の炬燵る
梅二寸の京1 嘆嘆める紙衾

寒夜 寒氷 炭 搗火 水鳥
新月や附ち寺ち鐘の夢
搗ちへ搗ち月ちりて寒夜ち
鴨寒ー 寒中のお いはちまて

寒よりも冥人寒し　炭二俵

身延七面山にて

樗の火や祖師の朋友も眼ぢかしを

さゝ一羽鶏ぶまでの日数鴨の夢

千鳥

押分て月こそ出れむらちどり

こゑをあらもちるおもて衾うれ

鳴て寒しとふとりの

うとゝなれ居れこゑるむし衾

雪途中吟　伴和

ちるちるの火よわるうりり秋の雪

島かと八百屋さうとや夜の雪

義仙　おもく寒うり湯ぬり雪の友

ちりうき飯うつ雪のうしろ哉

仙之　雪

掃よせん君いさ法くま」雪蓬ア

習ひてと知すかもあり紙ぞき

長砧　内　春

と年あをも裁て去年のり衣　硯り

年内立春

ふるしきもまた夜るも見ゆる　柳武
年志渡ある柳の本わたるより

年内立春の日年まれすれはいとをかしき

春の日をかりて推しやとしまれ

光陰を観に

かくて世を飾れくるなり年の暮

年波の浪しまをつれ　志く汁

起されてまんれて粟薬師　毛武

酒銚ハ銚ニいとゐなく薬銚ハ銚にする

志けしと師走を友のこれしられて

鼓盃と浮世かららむらしのられ

節分　宝船

大豆売ヨ七歩の吟や風ならひ

宝ぶん銚いはまんと入ある歩ら葛

巾の乗りありて絆をまとふら武士あり

琵琶をさひしく鶉ハ未まやりなり

義笠ホ　庵の捜さまよふて船

三芳野の旅宿しく花の衾衣の下臥せ
妹山脊山の伴もやのわうえさ〻係れ
櫻木と哀しく〻又や古ころく〻
基佐の風流ゝ〻笑殘の義擬
ゝ〻〻
質ゝとく〻物ゝ月めり年弥生
東方赤明衣裳轉倒
祐成ゝ條ゝく〻出ゝ〻ゝ〻のゝれ

明治十九年三月三日出版御届
同　年同月　出版　發兌
定價金四拾錢

編輯兼出版人　東京府平民　加藤正七　日本橋區通三丁目八番地

發兌人　大阪府平民　士口岡平助　大阪東區備後町四丁目

同　東京　隨時書房